

【羽衣】はごろも

羽衣という名の衣服は少なくとも奈良時代まではヒレと呼ばれ、「比礼」「比禮」の万葉かなで表記されていました。中国の衣服の領巾(レイキン)の字を当てることがあります。

その元は古代中国の高貴な女性の服装で、画像石のほか〈女史箴図巻・大英博物館蔵〉〈洛神賦図巻・フリア美術館蔵〉〈吉祥天画像・薬師寺蔵〉〈十一面観音像・法華寺蔵〉などにその様が見られ、正倉院にも該当する衣が現存しています。

薄く細長い衣で首、肩に廻らし風(気)になびかせる装飾性の強い衣服です。

『日本書紀』天武十一年三月には身分による領巾着用のお触が出されており、わが国でも高貴な女性の正装として実際に活用されていたことがわかります。

『延喜式』(平安初期の式法典)には「絹比礼八丈長五尺広二幅」「絹比礼四丈各長二尺五寸」などの記載が見えます。

ヒレは靈力を発揮する衣服として神話・物語にも登場します。

『古事記』上巻には大穴牟遲神が妻からもらったヒレを振り、迫り来る蛇を静め、むかで、蜂を追い払ったという話があります。

また『竹取物語』にはかぐや姫が身に着ければ心も天人となり地上への未練が消えるとされています。

ヒレにより飛翔する天人(飛天)は中国仏教に起源があり、西洋の有羽の天使(angel)は異なります。

もちろん、日本の天人は翼のない中国様式で〈玉虫厨子〉〈金銅灌頂幡・東博蔵〉〈法隆寺金堂壁画〉などが現存する最古の例となります。

ヒレは平安時代には羽衣という和風の名になりました。現在では天衣(てんね)と呼ばれることが多いようです。

羽衣伝説は現在東北地方から沖縄まで広く分布し「羽衣の松」と称する松はあちこちに点在するそうです。

『風土記』には近江国逸文・駿河国逸文・丹後国逸文に見られます。

この内、最も詳しく話の整った駿河国逸文のあらすじを記しましょう。

八人の天女が天から舞い降り、松の木に羽衣をかけて水浴びをしていました。

ある漁師がこれを覗き天女の羽衣を犬に盗ませました。これに気づいた天女たちはあわてて羽衣を身にまとい天へ駆け昇りましたが、羽衣を盗られた若い天女だけはひとり地上に残され、漁師の妻となり子を儲けることとなります。年月を経て、隠された羽衣を見つけ天へ帰りますが、漁師も後を追いついて昇仙するという結末です。

謡曲『羽衣』は『風土記』の伝承を基としますが、漁師は天女の水浴を覗くことも、天女と暮らすこともなく子も儲けません。春の富士山を背景とし、天女の清純を基調とした羽衣伝説です。これもあらすじを記しましょう。

三保の浦の漁夫白龍らは天から花が降り、音楽が聞こえ、香が漂う不思議な光景の中に松の枝に掛かった美しい衣を見つけます。家宝にと持ち帰ろうとすると、衣を返してほしいと天人が現れます。白龍が拒むと天人は天に帰れないと訴えます。哀れに思った白龍は天人の舞楽を披露することを条件に羽衣を返します。

天人は喜び羽衣を着て東遊の駿河舞を舞い国土に宝を降らせるのでした。やがて天人は愛鷹山から富士の高嶺へと舞い上がり霧の中へ消えていくという結末です。

全国にある羽衣伝説の中で三保の松原の地が最も有名なのはこの曲がかの地を舞台としたためでしょう。

春ののどかさが伝わってくる銘ですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~